

港まち能代の玄関口として！

～能代港の今とこれから～

市民リポーター 佐藤 幹子・近藤 智子

秋田県で最も古い歴史を持ち、かつて秋田藩のもとで、木材の集積地や海防の要地として栄えた能代港。現在は重要港湾に指定され、国際港として世界と能代をつなぐ能代港について、県能代港湾事務所と市商工港湾課でお話を伺いました。



輸入された石炭はベルトコンベアで貯炭施設へ



石炭船グリーンパワー



能代火力発電所

16年度、能代港の外国船入港数は129隻で、取扱貨物のほとんどが輸入です。その約95%は能代火力発電所で使用する石炭で、オーストラリア・インドネシア・中国・ロシアなどから輸入されます。能代火力発電所で使われる石炭は、大型の石炭船で輸入されます。石炭船は火力発電所の岸壁に着岸し、石炭はベルトコンベアで直接貯炭施設に運ばれます。

そのほかに輸入されているものとしては、原木、木材製品、原塩があります。原木はカナダやロシアから、木材製品はマレーシアやインドネシアから輸入されます。原塩の主な輸入先はオーストラリアで、食用ではなく、冬期の道路の融雪に使われています。

○外国船と能代港



港に積み上げられた原木（左）と金属スクラップ（右）

東北地方の高速道路に使用する融雪剤のほとんどが能代港に陸揚げされるそうです。輸出は、中国や韓国への金属スクラップだけだということです。県の能代港湾事務所では、港の維持管理、入港や施設使用の許可などの仕事をしているということですが、最近では保安対策が特に重要になってきているそうです。アメリカで起こった同時多発テロの後、ソーラス条約（海上人命安全条約）が改正され、国際航海に従事する船舶が使用する港では保安対策を強化することが義務づけられました。能代港でも、一般の人の立ち入りを規制したり、新たに警備が配置されたり、国際海運の安全のため、さまざまな対策がとられています。